

令和元年6月12日現在

機関番号：32670

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07148

研究課題名(和文) 十八世紀京都画壇における植物イメージと異国表象に関する研究 伊藤若冲を中心に

研究課題名(英文) A Study on the Plants Images and the Foreign Expressions in Kyoto of the 18th century-Focused on the Paintings by Ito Jakuchu-

研究代表者

森下 佳菜 (MORISHITA, Kana)

日本女子大学・人間社会学部・助教

研究者番号：70802528

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：伊藤若冲および十八世紀京都画壇における「外来植物(熱帯植物)」を描いた絵画を対象に、それらが示す植物イメージと受容者を明らかにするために、画題と図様に着目した画像データベースの構築を行った。その結果、とくに若冲の場合、異国を示すイメージとして意識的に選択し描いたことが分かった。また受容者は、公家などの上層階級が想定できると考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、従来の若冲研究においてさほど比重が置かれていなかった「植物」モチーフの考察を行い、若冲画の分析を通して十八世紀京都画壇のあり様を考究した。その結果、とりわけ若冲画の植物モチーフには意図的な選択がうかがえること、また、これまで享受者としてあまり注目されていない公家層が想定できること等、若冲画の新たな一側面を見出した。伊藤若冲は近年人気を博している画家であり、本研究の成果は、若冲研究や近世絵画史研究などの学術的意義のみならず、社会学的意義にもつながるものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：In order to clarify the meanings and the recipient, a database of images was constructed using the paintings "the imported plants" (tropical plant) drawn by Ito Jakuchu and the painters in Kyoto of the 18th century as the subject. The result was that Ito Jakuchu drew those as the image indicating the foreign country consciously. In addition, it can be said that the recipient can be assumed the upper classes such as court nobles.

研究分野：日本美術史

キーワード：十八世紀京都画壇 植物イメージ 異国表象

1. 研究開始当初の背景

研究者はこれまで、伊藤若冲（1716-1800）研究における新たな視点を提示するべく、とくに禅宗寺院・禅僧との関係に注目した研究を行い、それらを取り巻く若冲の人的ネットワークや宗教的側面を明らかにすることを試みてきた中で、さらなる広い視野からも若冲像を捉えるべきと考えた。

また、これまで注目してきた宝暦・明和の時期（1751~1771）は、若冲の画歴において禅宗寺院や禅僧との交流が盛んであったと同時に、博物学的関心の高さをうかがわせる作例も「動植綵絵」などから多数見出すことができ、とくに多種の植物画が描かれた時期でもあることがうかがえ、それらとの関連についても検討する必要があると考えた。

古来、植物は和歌に詠まれたように、季節を表すイメージとして親しまれ、絵画においても描かれてきたが、とくに近世以降は、園芸文化や博物学的関心の高まりによって、在来植物のみならず外来植物も含め多様な植物が描かれた。琳派による「草花図」や大名が描いた写生帖、出版された絵手本・画譜類等にも外来植物を確認することができる。さらに、十八世紀の京都では本草学が盛んになり、宝暦・明和期においては、物産会が行われるようになり、外来植物を庶民が実際に目にすることも可能となった。

そこで本研究では、これまで得た見解を踏まえつつ、京都や国内には自生しない外来植物、とくに熱帯植物を描いた若冲画に注目し、その背景を考察することとした。また同時に、想定される享受者についても考察を行うこととした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、十八世紀京都画壇が描いた植物イメージに関する背景と受容について、とくに異国趣味や異国認識が取り込まれたとみられる外来植物—熱帯植物を描いた伊藤若冲の作品研究を通じて、十八世紀京都画壇のあり様を明らかにするものである。

当時高まっていた博物学的関心のみならず、黄檗宗の伝播や南蘋派絵画の流入、中国趣味や琉球物の流行といった同時代の文化的視点も重視しながら、伊藤若冲が熱帯植物をモチーフとして採用した背景と享受者について考察した。

本研究でとりわけ「熱帯植物」に注目する理由は、以下の二点である。

第一に、若冲は熱帯植物を描く際に意識的な描き分けを行っていたとみられるからである。たとえば、「動植綵絵」（全三十幅）には、熱帯植物は「棕櫚雄鶏図」一幅を除いて、描かれていない。一方、同時期に制作された「鹿苑寺大書院の障壁画」や「金刀比羅宮奥書院の障壁画」、拓版画の画帖『素絢帖』『玄圃瑤華』等には複数の熱帯植物が描かれており、作品によって意識的な選択がなされたことがうかがえる。つまり、熱帯植物を描くか否か、何かしらの理由が存在しており、若冲の画業の中でどのような意味を持っていたのか、若冲が熱帯植物を画題として採用した背景を探った。

第二に、「熱帯植物と画家、受容者」という観点において、すでに先行して渡辺始興と円山応挙に関する研究が行われているからである。熱帯植物（琉球植物）に関心を寄せていた近衛家熙に仕えた渡辺始興と、始興に私淑した円山応挙、加えて狩野派を継承する山本宗川や鶴澤派は、それぞれ公家社会の需要に応えるために熱帯植物を描いたことが指摘されている。つまり、彼らが描いた熱帯植物の享受者は、公家たちであった。これらの作例と若冲画を比較検討し、共通性や違いを見出すことにより、若冲が描いた熱帯植物の享受者についても明らかにすることが期待できると考えた。とくに、若冲と同時期の円山応挙の研究を参照し、若冲の場合を検証すべくつとめた。

3. 研究の方法

本研究を進めるにあたり採用した方法は、以下の二つに大きく分けられる。

第一に、伊藤若冲および十八世紀京都画壇における「外来植物（熱帯植物）」を描いた作品の分析・比較検討を行うために、それらが描かれた年代や材質、所蔵先といった作品の基本情報のみならず、画題（植物の種類）や図様といった細部表現も含めたデータの蓄積を図り、データベースの構築を行うことである。

第二に、作成したデータベースに基づきながら該当作品の資料収集・調査を実施し、比較検討を行うことである。

これらの方法を用いて、平成29年度は主に「若冲が熱帯植物を描いた背景」を、平成30年度は主に「熱帯植物を描いた若冲画の享受者および十八世紀京都画壇の動向」をテーマとして取り組み、考察を行った。また、伊藤若冲における熱帯植物を描いた絵画作品の分析を端緒とし、十八世紀京都画壇が描いた異国の植物イメージに関する背景と受容について、美術史的観点だけでなく多様な文化的観点からも探り、制作環境の一端を明らかにすることを目指した。

4. 研究成果

本研究の最大の成果は、伊藤若冲および十八世紀京都画壇における「外来植物（熱帯植物）」を描いた作品を蓄積した総合的なデータベースの構築ができたことである。データベースは、画題や図様の類似関係を見出して分析・比較検討を行うために、該当する画像データを集約した。データベースの作成に際しては、当時の植物図譜など本草学に関する出版物を参考にしながら「外来植物（熱帯植物）」モチーフを抽出し、それら該当作品の「制作者・作品名・材質・員数・作品年代・所蔵先」の基本情報を記述するとともに、描かれたモチーフや図様、形状といった細部表現についても併記した。そのうえで、抽出作品をモチーフ（植物の種類）ごとに分類・整理し、画像データを蓄積した。また、文献資料等から得た文字情報があった場合には付加するかたちをとった。このような手順を進めた画像データベースは本研究の基礎となるものであったため、構築には多くの時間を要したが、総合的なデータベースを構築することができた。

結果、とくに若冲画において「外来植物」に該当する植物は十八世紀京都画壇のなかでも多数を占めた。それらのうち、たとえば、鹿苑寺大書院障壁画に描かれたモチーフについては、同時期に制作され、「外来植物（熱帯植物）」が描かれる『素絢帖』や『玄圃瑶華』といった若冲画譜と比較検討を行ったところ、熱帯植物に特化したものではないものの異国イメージを表す植物として意識的に選択され、さらには障壁画全体が異国的な空間として機能することを期待されて描かれた可能性が高いことが明らかになった。これは、鹿苑寺障壁画の若冲画研究において新たな見解を提示するものであり、公刊論文を発表した。ただし、本データベースは、主に熱帯植物を中心とした外来植物のデータを抽出し構成したものであり、今後は対象の幅を広げてデータを随時追加していく必要がある。また、時間の制約上、蓄積した十八世紀京都画壇の作例は主要なものにとどまっているため、併せて更新していきたいと考える。

第二の成果は、対象作品の資料収集および調査が実施できたことである。主に関西方面の美術館・博物館あるいは個人所蔵の関連作品の熟覧および写真撮影を行い、資料・画像収集が実施できたことは大きい。結果として、本研究のデータベースの構築に貢献するとともに、比較検討作業を行う際の重要な柱となった。

本研究ではこれらの成果を基に、以前より指摘されている渡辺始興、近衛家熙、円山応挙の相関関係に注目し、それらと若冲との関連性や享受者について分析・検討を行った。その結果、若冲作品を通じた文化人ネットワークの中に近衛家の関係者が見出せること、また「熱帯植物」を含む博物学的関心がうかがえる植物を描いた若冲画の中には公家層の文化人による関与も認められた。このことは、若冲画の享受者としては従来あまり注目されていない階層の人物たちであるといえる。本データベースからもうかがえたように、同時代の京都画壇の中でも極めて高かった若冲の博物学的関心は、大坂の町人・木村兼葭堂やその周辺人物たちとの交流が大きな影響を与え、彼らが享受者でもあったことがすでに指摘されている。そのような中で、若冲画の新たな側面としての可能性を見出せたといえる。

さらには、十八世紀京都画壇の「熱帯植物」を描く意味についても考究し、看過できないこととして挙げられるのは、若冲と応挙の画歴における「熱帯植物」を積極的に描き、博物学的関心をうかがわせる時期（宝暦・明和期）が重なっていることである。当時、両者に直接的な交流があったかは不明であり、同時代の文化史的動向（黄檗宗の伝播や南蘋派絵画の流入、中国趣味の流行など）が背景として考えられるが、享受者層は共通して公家などの上層階級が想定できる。改めて浮かび上がった「熱帯植物」画と公家層、十八世紀京都画壇の相関関係は、本研究で作成したデータベースを活用しながら、今後さらなる考察を深めていきたいと考える。また、本研究を遂行するにあたり未完了となった、鶴澤派や山本宗川などとの関連性についても併せて今後の課題として継続して取り組むこととしたい。

なお、以上のような本研究を通じて見出せた、いくつかの成果については、今後、随時発表していきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 1 件）

森下佳菜「伊藤若冲筆「鹿苑寺大書院障壁画」再考—選択されたモチーフの意味と室空間におけるその役割—」『日本女子大学大学院人間社会研究科 紀要』第 25 号、112～138 頁、2019 年、査読有

6. 研究組織

(1) 研究分担者

なし

(2) 研究協力者

なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。